

本学を支えてくれた人びと

西山敬人基金の創立について

西山 敬 兼

今回、富山医科薬科大学開学三十周年の記念に招かれ、多数の来賓及び大学関係者の前で小野学長から感謝状を贈呈された事は、私たち夫婦にとって身に余る光栄とと思っています。

西山敬人基金が創立されたのは平成5年であります。もう早くも12年が過ぎました。基金が主として多くの中国からの優秀な留学生の援助に役立っていることに、幸せを感じています。

基金はわたしの息子敬人が平成4年4月18日に交通事故に遭い、5日後に大学関係者の懸命の治療にもかかわらず、亡くなりました。その時の保険金を中心に創立されました。

息子は土曜日で大学は休みでありましたが、緒鞭会の新入会員の集まりがあり、大学から自転車で杉谷の下宿に帰る途中に交差点で軽四輪自動車と衝突しました。事故は頭蓋骨骨折の脳挫傷で、富山日赤病院へ運ばれたときはほとんど即死に近い状態であったとのことです。私たち夫婦が病院へ着いた時は呼吸は停止して人工呼吸器が付けられていました。いわゆる脳死の状態であったのです。大学のはからいで日赤から富山医科薬科大学附属病院に運ばれました。そして、赤井先生が受け持たれ、遠藤助教授と高久教授のお世話になりました。事故の5日後の23日に心停止しました。クラス担任の白木教授、山本教授、高久医学部長はじめ多くの大学関係者にはお世話になりました。

息子があこがれの和漢薬研究所のある国立の富山医科薬科大学の入学式からたった8日で富山医科薬科大学の生活は終わりました。恐らく、遠く離れた香川県からでは、息子を知る友人もなく、新しく入学した同級生たちにはほとんど印象もなく、彼が富山医科薬科大学の学生で在学した事が忘れ去られるのが親として無念に悔しく思いました。

入学をあのように歎び、希望に満ちていた息子の足跡を何らかの形で残したいと願いました。そしてそれが医師となって社会に役立つ事のかなわなかった息子に代わり、何か役に立つ事であればと思いました。そのような時、当時の田辺副学長から、私たちと同じように、交通事故で医学生であったご長男を失った薬学部の小橋先生が、奨学金を作っておられる事を知り、奨学金を作る事を決めました。息子が入院中に大学の敷地内を歩いている時に、留学生会館がある事を知り、海外からの留学生の手助けができればと思い西山

敬人基金を海外からの留学生に使う事を決めました。基金の設立には山本先生、白木先生、高久医学部長をはじめ多くの大学の関係者の御努力もあって基金は設立されたものです。

基金の使い方については私の希望として、明治維新に始まる日本の近代化において、日本が小国から何とか近代国家として独立を果たすことができ、欧米列国の植民地にならずにアジアでの独立した近代国家となりましたが、近代化に遅れたアジアの国々の独立と近代化を助ける事を忘れ、欧米列国をまねて、帝国主義の国家になり、それが破綻し滅び去るまでの間、多大の損害をアジアの国々に与えました。そのことを忘れずに、少しでも謝罪の為に基金が使われる事を希望しました。会の運営にあたり多くの富山医科薬科大学の関係者皆様のお世話になっています。

今回、富山医科薬科大学開学三十周年記念式典に招かれて、今日まで基金により北京医科大学から優秀な学生が留学して来て、学んでいるとの事を具体的に知り、彼らが日本で学んだ事が中国に帰って役立ち、日中友好の懸け橋になってくれる事を望んでいます。

戦後60年経っても、今年、起こった中国の反日運動は燎原の火のごとく燃え上がりました。心ない日本の政治家たちの過去の大日本帝国の行った誤った行為を正当化する言動が、如何にアジアの人々の心を逆なでしている事も自覚しないのは心が痛みます。西山敬人基金はわずかなものでございますが、基金が富山医科薬科大学を通して、これからも日本とアジアの国々の友好に少しでも役立つ事を望んでいます。

最後になりましたが、富山医科薬科大学が富山大学医学部、薬学部となりますが、ますます発展され学問研究と立派な医師・薬剤師の養成の機関としての使命を果たされる事を願っています。

西山敬人君の本学入学直後の急逝にかかわる 西山家と本学との連繋について

名 誉 教 授 山 本 恵 一
 医 学 部 教 授 白 木 公 康
 医 学 部 教 授 遠 藤 俊 郎
 学 生 課 専 門 員 宮 村 健 壮

平成4年4月18日午後5時6分、4月10日入学されたばかりの敬人君が宿舎近くの杉谷内を自転車走行中に、同地在住の某女性の運転する軽4輪との衝突に因り頭蓋底骨折、頸椎損傷の重傷に遭われました。その際身分証明書など未取得であったことから、身元不明とされた同君は、医薬大附属病院から至近の場所での遭難でありながら、当該日の救急指定当番であった富山赤十字病院へ搬送されてしまい、身分判明後も応急の処置を余儀なくされました。通報によって急遽応援に駆け付けた本学脳神経外科遠藤助教授（当時）等の診療記録をみると、同日午後10時には両側瞳孔散大、脳幹反応消失、自発呼吸停止に陥られたため、以後レスピレーター管理と血圧維持を主体とする状況になっています。

そこで令息の急を知って来富されたご両親からの強いご要望、即ち「折角医薬大入学の素志を達成した敬人のことを想うと、仮令回復は望み難い病態であったとしても、宿願であった富山医科薬科大学の附属病院で最期の治療をうけさせてやりたい」とのお気持ちには抗し難いところから、進んで移送中の呼吸管理の責を負った私ども呼吸器外科スタッフの随行のもとに、翌4月19日午前8時医薬大附属病院への再移送を行いました。その後5日間に亘る脳神経外科高久晃教授以下主治医団の昼夜を分かたぬ奮闘も酬われることなく、遂に平成4年4月23日午前8時21分、脳死症状発生後110時間で召天されました。その後筆者は4月25日に郷里香川県観音寺市で営まれた喪送に参席する機会を与えられ、また敬人君のクラス担任であって、厳父敬兼博士とは同学の誼を交わしておられた白木公康教授は、幾度か忌日の弔問を重ねておられます。これに関連して私どもは平成15年10月、その13回忌を記念して、歌人であられる母堂西山幸子女史が刊行された歌集「おもかげ」をお贈り戴き、その歌集が10余年前の西山家挙げての闘病記録の昇華したものであることを識りました。その一句一句は、恰も死と対決する令息と西山ご両親とが一体となって「いのち」を追求しようとしている実態を余すところなく訴えていることを感得させるものであります。それは無味乾燥な医学用語を羅列した診療録、看護記録に数倍して傷つき斃

れた敬人君の実態を顕示していることに衝撃的ともいうべき感動を覚えるとともに、一般に診療録と見なしているものが、必ずしも患者と家族との実情を十分に把握しているものではないことも理解され、赤面、汗顔の思いを禁じ得ませんでした。

西山敬人君の没後4月も経たぬ平成4年8月に、疾くもご両親より本学宛に故西山敬人君の名を冠した奨学基金を提供したいとの申し出を戴き、それは営々として已むことなく現在に至っていて、とくに平成10年以降我が国経済界を直撃した不況の嵐にも寸毫も揺らぐことなく続けられていることを特筆大書せねばなりません。それは、まず平成4年8月に5,000万円を寄付され、以後毎年1,000万円を追加されて計1億円の基金が確定されました。更に平成10年度以降の不況下では基金の果実のみでの運営が困難視されるに至ったため、奨学金供与維持のために毎年200万円の運用資金の寄付（平成14年度まで）を加えられ、15年度に入り、新たに「健康が許す限りは毎年寄付金を続ける」旨申し出られた結果、現在までに総額1億1,800万円の資金を本学医学部の次掲学生の奨学のために寄贈されました。寄付者西山敬兼・幸子ご夫妻による「西山敬人基金」設置の目的を尊重して医学部内に設置されている基金運営委員会が策定した奨学金供与基準は次の如くであります。

- (1) アジア出身の外国人留学生および若手研究者に対する奨学援助、および研究等の助成（平成10年度から）
- (2) その他経済援助が必要と認められる学生、および若手研究者に対する奨学援助、または研究等の助成（平成5年度から12年度迄）

* 西山ご夫妻のご説明に拠れば、この奨学基金の設立の趣旨は、先にも述べた如く、令息が勉学の間として希求した富山医科薬科大学医学部に故人の名を冠した奨学基金を遺したいとの願いがこめられていることと併せて、以前故人の祖父西山敬三博士が軍医として日中戦争に従軍された際に実体験された中国各地での旧日本軍人達の心無き行為の償いをしたいという宿題を懐いておられたことを継承する意味もあるとのことでありました。

本学医学部の「西山敬人基金」運営委員会の事務を取り扱っている宮村健壯専門員によれば、受給奨学生は現在までに32名に達し、また同基金による国際学術交流事業に基いて招聘された研究者・留学生は14名にのぼるとのことであって、中国各大学間では同基金の知名度が高いとともに、例えば北京大学では基金受給によって日本留学を体験した学生、研究者達の集いも持たれているとの噂も聞いているとのことでもあります。

そのようなアジア各地、とりわけ中国各大学からの留学生・研究者に対する寄与の成果を讃えることに関して次掲の表彰が為されて来たことをご紹介して拙稿を終わりたいと存じます。

平成5年6月30日 紺綬褒章受章

10年3月10日 学長感謝状贈呈

14年10月1日 同感謝状・楯

17年8月27日 本学30周年記念式典において感謝状・記念品

(文責 山本)

無 題

(株)セイジョー代表取締役会長 齊 藤 正 巳

私が富山薬専（現 富山医科薬科大学）を卒業したのは、戦後の混乱がまだ治まっていない昭和24年（1949年）の4月であった。

卒業しても不況で就職がままならず、先輩が始めたばかりの医薬品問屋に同級生2人と就職した。社員は8人ほどで営業は4人であった。何から始めてよいかわからず、まず歯科医院から回った。だんだんコツがわかってきたので、大病院にチャレンジした。大病院には大手の問屋が入っていて、初めは全く相手にしてもらえなかったが、ねばり強く通ううちに根負けして薬局長に会ってもらえた。

幸運な事に、この方は富山の氷見出身ですぐに富山弁がわかり、同じ故郷ということで話を聞いてもらえ「小さな問屋で苦勞が多いだらうと」注文を出してもらえた。あきらめず粘った結果で商売のことを「アキナイ」という意味がわかった。

たまたま病院職員の検診があるときに居合わせ、医長に頼んでレントゲンを特別にとってもらった。1週間後にその先生から「すぐ来い」と電話があって行くと、左下葉に親指大の空洞があることがわかり、手術を至急することを勧められたが、結婚したばかりで妻の生活を何とかしなければならぬと思った。成城の町のハズレに6坪ばかりの店をたまたま見つけたので、それを借りて薬局を始めて1年後に肺の左下葉切除の手術をした。1950年の11月であった。成城はお屋敷町で買い物はほとんど女中さんが紙切れに書いたもので買い物され、接客による推売は出来なかった。ある日、風邪薬のメモで買い物に来た女中さんに家の住所を聞き自転車で直接訪ねてみた。ご主人が床に伏せておられ、大変に喜ばれ氷嚢や氷枕、体温計などの注文がとれた。それからはこんな立地の悪い店では注文をとるにかぎると午前中は魚屋、八百屋と同じように一軒一軒お屋敷を回ったところ、大変に喜ばれて店の1日の売上の3倍以上になった。

これに自信を得て、夜間高校の学生をやとって御用聞きを広め、最高で20人以上のセールスが育った。

資金難もあって支店を出すことが難しかったが、たまたま隣町のハズレの店が営業不振のため家賃を半額にして借りてくれといわれ、改装も少額で済み、これが支店の第一号で年に1店舗の割合で増やしていった。10店舗ほどに増えたが、資金繰りが苦しくてほとん

ど信用金庫に通い詰めであったが、なんとか乗り切り、1969年に「株式会社セイジョー」と改名し、店舗数も50店を超え、売上も100億円に達し、1995年に株式を店頭公開し、資本金が13億円となった。店舗数も200店を超え、2000年に東証2部に上場し、さらに2001年に東証1部に上場した。資本金も39億円となった。

薬業界も10坪、20坪の小型の店から、100坪以上のドラッグストア時代を迎え、当社も現在では、店舗数195店、年商450億円、経常利益33億円に達した。

母校である富山医科薬科大学に感謝をこめて、平成9年12月に500万円、平成10年12月にさらに500万円の育英資金を寄付した。

斉藤正巳氏を語る

元 学 長 山 崎 高 應

斉藤正巳氏は、私が昭和21年2月、富山薬専に奉職した直後、魚津中学から新入生として入って来た。この年は雪が多かったことを記憶しているが、もう一つ入試のときに面接をしたことも覚えている。この卒業生のクラス会をやるとよく、面接の話が出る。私は志甫徳次郎先生と組んで面接に当たった。

斉藤氏は昭和24年卒業と同時に、終戦後、国の経済が未だ立ち直らぬ時代であった。郷里をはなれて就職したといっても、食べて行くのが精一杯の時代に、日本物産に入社して半年で職場を変えたが、薬専で得た知識を生かしたいと考えて、医薬品問屋に入ったが、これも2年間の修業で、自ら成城薬局を始めたのが、昭和26年であった。それから54年間、時に重い眼病をわずらいながら、事業発展のために、死闘してきた立志伝中の人である。その間、富山化学創始者中井敏雄氏や、金薬工業の橋本弘氏等先輩に、私淑してきたと、何かの折に執筆しておられたのを記憶している。

彼は橋本さんのあとを継いで、薬窓会首都圏支部の世話を長年にわたってやってこられた。私も上京すると時々お会いする機会があった。たまたまそんな時があって株式の店頭公開につき二部上場をしたので、この際、学校に対し何か出来ることがあればと、1,000万円の奨学金を出して下されることとなった。今や、東証一部で、セイジョーとして上場されている。首都圏でドラッグストア190店まで拡張された。先般の月刊誌「富山県人」の中にも、郷土の成功者の一人として、誌上の人となっておられる。

同僚、先輩、として斉藤氏の限りない御健勝と発展を念願して筆を擱く。

* 斉藤氏の経歴を以下に記載します。

平成17年 9月19日

齊藤正巳氏の経歴書

1929年	昭和4年	7月26日	生まれる	
1936	11	4	7歳	下條小学校入学
1937	12		8歳	日中戦争
1941	16		12歳	日米戦争 小学6年
1942	17	4		県立魚津中学校入学
1946	21	4		官立富山薬学専門学校入学
1949	24	4		日本物産入社
	24	10		医薬品問屋湊研究所入社
1951	26	々	22歳	有限会社成城薬局開局
1967	42	1		株式会社成城薬局
1969	44	5		株式会社セイジョー
1995	平成7年	2月24日		株式公開(店頭)13億円
1996	8	6		増資28億2305万円
1997	9	12		富山医科薬科大学500万円寄付
1998	10	8		紺綬褒章受章
		12		富山医科薬科大学500万円寄付
1999	11	8		紺綬褒章受章
2000	12	9		東証2部 資本金39億円
2001	13	9		東証1部上場
2002	14	6		千葉薬品合併
2005	17	9		売上高 450億円
				経常利益 33億円
				ドラッグストア店舗数 195店

横田基金の覚え書

元学長 山崎 高應
名誉教授 森田 直賢

横田嘉右衛門先生は昭和19年徳島高等工業学校から富山薬学専門学校長として着任されました。昭和20年8月、太平洋戦争中、米軍の富山大空襲で公舎は全焼に帰し、その学校の復興に心身ともに懸命の努力をされました。

昭和24年、学制改革で富山大学薬学部となって、その初代の薬学部長になられ、爾来薬学部長を6期の長きにわたって務められて、研究、教育に尽され、また富山県薬業の発展に多大な貢献をされました。その後、さらに先生は2期にわたって富山大学長に選出され、富山大学の発展に努力され、昭和44年3月に学長を辞任されました。

ご退官後の昭和50～56年まで富山医科薬科大学の参与として学長の諮問に当たられました。その間、先生のご功績で北日本新聞文化賞を、さらに勲二等旭日重光章の栄に浴されました。

辞められてからは悠々自適の余生を過ごされていましたが、体調を崩されるところとなり、県立中央病院に入院されていましたが昭和56年9月24日、午後1時40分、ご逝去になりました。享年83歳でした。また奥様愛子様には昭和61年4月7日、午後6時25分、ご逝去になりました。

先生ご夫妻にお子様はなく、何人かの甥の中で生前に、東京都庁勤務の横田行二氏を養子にと伺っておりましたが、養子縁組不成立となり、奥様にも病でご入院中、県立中央病院で奥様の嘱託で証人として吉原節夫氏、井口右子氏の立ち会いで奥様の口授の筆記で遺言公正証書（昭和61年第276号）が作成されました（昭和61年3月15日）。

それによると、◎信託不動産（富山市長江新町1-7-8自宅）は売却までの間、大学教職員および外来教育研究者の研究宿泊施設として使用すること、◎信託不動産は、受託者（山崎高應）が適当と思う時期に売却処分し、その買主に所有権移転登記手続きをすること、◎売却代金から各種必要経費（公租公課、売買仲介手数料、管理費、保険料など）一切を受益者（富山医科薬科大学）に寄付し、横田基金として、教育研究活動の助成の目的とすることが決められました。

横田嘉右衛門先生 —その晩年—

前学長 高久 晃

「春風接人 秋霜接己」



晩年の横田嘉右衛門先生から私にいただいた色紙である。先生は私の出身校福島県立会津高等学校（旧制会津中学校）の大先輩である。横田嘉右衛門先生はこの色紙の如く「他人に対しては暖かく、やさしく、自分に対してはきびしく」という人生哲学を地で示された硬骨漢であり、いまやいなくなりつつある明治の人、会津魂が脈々と生きている先生であった。

旧制第四高等学校、東京帝国大学医学部薬学科ご卒業の後は徳島、岐阜で薬学の高等教育機関の教育、研究、発展に寄与され、時あたかも第二次世界大戦の昭和19年、富山薬学専門学校に校長として赴任された。

山崎高應先生によれば、富山の空襲後の壊滅的な薬学専門学校の破壊からその復興に心血を注がれ極めて大きな功績を残されたとのことである。

教授、薬学部長、富山大学学長時代の横田先生を私は知らない。しかし富山大学薬学部に進学した私の高校同級生の友人鈴木周則君からは「横田先生御夫妻は学生を自宅に呼んで物のないあの時代でもご馳走するのが大好きだった。特に会津からの学生には郷土料理の『いも煮』と納豆餅をふるまわれ、ものすごく面倒見の良い先生である」と聞いていた。

昭和50年（1975年）の夏、木曜日の朝であったと思う。前任地の東北大の脳神経外科の医局行事、朝野球の間に富山の??先生から電話があったとの家内の報告を受けた。??先生とは余りにもズーズー弁で聞きとれなかったらしい。「お宅のご主人が新設される富山医科薬科大学の教授に当たった」とのことである。宝くじ並みの「当たった」という表現は横田先生流のユーモアだったようである。確かにその年の4月の教授公募に私は無手勝流で何のゆかりも知人もいないこの地の大学新設の教授に応募していた。ただ高校時代の富山大薬学部出身の友人を通じ会津出身の高久という男が応募した旨、横田先生に一報入れてもらってはいた。

教授内定の正式な通知後、私は長江団地に横田先生に挨拶をするため出かけた。すでに

老境に入っておられた横田先生は、冒頭の色紙からも察しがつくように会津の古武士であり、私の富山大の着任を我が事のように喜んでおられた。

また愛子夫人は会津女学校で私の母の4年後輩であり、上品なおばあちゃんであった。横田先生は私の実家近くにあった造り酒屋の御曹子であり、そのルーツは会津藩の家老とのことであった。また奥様は古くから会津漆器おおだなの大店「鈴利」筋すずりの一人娘であることを知った。その時すでに両親を失っている我々夫妻は、以後横田先生ご夫妻に大変なお世話になった。

晩年の横田先生は週に2～3回も西町の「がくや」という喫茶店で夏はおろか真冬でもアイスコーヒー、それにホットサンドを楽しんでおられ、我々もそのおこぼれを頂戴していた。雪の日でもこの予定は実行されていたが、豪雪の降ったある時「ご老人が雪で転んでは危ない」との理由でトミタクからタクシーの配車を遂に断われたと聞いたことがある。

本当に仲の良いご夫婦であり、奥様は横田先生をいつも「おとっつあん」と呼ばれていた。また横田先生ご夫妻の会津帰郷の際は福島県薬窓会の方が新津まで迎えに出られ、もっぱらいねむりしている横田先生を会津まで送りとどけていたようである。そして宿は富山在住の会津出身の歯医者さん山下銀七先生の姉さんの旅館、会津芦牧温泉「福満荘」を定宿とされていた。

しかし横田先生は、昭和56年突然脳出血で倒れられ、県立中央病院に入院されたが主治医大山先生の努力にも拘らず85歳で他界された。一方、愛子夫人は、その後数年お元気でいられたが、消化器疾患に罹患され県立中央病院辻外科部長（現済生会富山病院長）の執刀にも拘らずおなくなりになった。ご葬儀は時期こそ異なれ大法寺でとり行われ、また、お二人とも会津若松市にある本家筋のお寺「浄光寺」に分骨されることになり、山崎高應先生、森田直賢先生と共に2回に亘り、横田先生ご夫妻の遺骨をお守りしつつ、私は車のドライバーとして会津入りした。そのことがつい最近の如く思い出される。

四代目富山薬学専門学校校長、初代富山大薬学部長、第四代富山大学学長として、薬学会、そして富山県の高等教育に多大な功績をあげられた横田嘉右衛門先生であり、また御逝去後は全遺産を富山医科薬科大学に寄付、横田基金として活用され、現在に至っている。この基金も1986年制定後20年にならんとしており、大学も組織形態が変わり、構成員も幾多星霜の中で変わりつつあり、横田基金の存在理由や横田先生の偉大な人格等についても、埋没、忘れられる心配がない訳ではない。同窓生による横田嘉右衛門先生顕彰会や在任中の功績等については、山崎高應先生の筆におまかせすることとし、私は晩年の横田先生の

気骨ある断面を秘話として記したつもりである。

公私共にお世話になった横田嘉右衛門先生ご夫妻にあらためて感謝の気持ちをささげ、この稿を閉じる。

元富山大学長 横田嘉右衛門先生を憶う

元学長 山崎 高 應

名誉教授森田先生が横田基金について既に記述されているので、重複を避けて私の思い出を幾つか述べてみたい。私が終戦後家の仕事をした頃、福島県南会津郡の殆ど全部を回っている。その中に、電源開発で有名な只見町の近くに横田村という村があった。

その時は何ということもなく回った。翌年私が富山薬専に初任給95円で雇って貰って暫くして、横田先生からいろいろお話を伺っている中に、横田家は元会津藩の家老で会津戦争に敗れて、一族郎党が若松をのがれて逃げのびた所を横田村としたとのことである。先生は最後の家老の孫である。会津中学を経て金澤第四高等学校に入学した。

当時横田家は会津きっての資産家であった。家業は薬店であったが幼少の折、母親に死に別れ、継母が迎えられた関係で、幼少の頃は殆ど祖母の手で育てられた。その上父君が酒豪であったからか、後妻様の実家が酒造業であった故か、薬店を廃業し酒造家を開業したが、酒蔵の酒が腐って廃業の憂き目にあったとのことである。しかし先生は家業の薬店に関心が強く、東大薬学科に進学し研究室に残った。当時梅毒の特効薬として有名なサルバルサンに関連して、有機ゼレン誘導体の合成で学位を取得しておられる。

そのほかのことについては森田名誉教授が述べているとおりであるが、一つ微笑ましい逸話がある。それは私が恩師菅沢教授から直接伺った話である。おい山崎君、横田君はあんな無骨で愛想のない顔をしているが、彼の奥さん（愛子さん）とは大変な幼馴染みで、子どもの愛子様を乳母車に乗せて押して遊んだらしい。一度横田君に聞いてみよと言われて、訊ねたら笑って居られたが、奥様は、菅沢さんがそんなことを言われましたか、悪い人ですねと言ってこれも笑って居られた。長ずるに及んで会津高等女学校に学び（五代目高久学長のご母堂の四年下級生）、のち（実践女子大）の前身実践女子専門学校に学ばれた。丁度横田先生が大学を出て教室に残って居られた頃であろう。時にはデートもなさったことであろうが、さて結婚しようかとなったとき、愛子様は若松の漆問屋鈴木家の一人娘で跡執であった。恐らく横田先生の祖母の実家かも知れない。先生を養子にと乞われたが、横田先生俺は横田だ、養子は御免という。愛様は横田でなければ嫌だと申されたとのことである。結局奥様の実家は従兄弟に当たる男性が鈴木家を継ぎ、横田夫妻思いを遂げられたという次第である。

横田ご夫妻のご遺骨は会津若松の菩提寺の一隅大きい骨室に安置されているが、富山市梅澤町の大法寺にも分墓があり、お二人の御遺骨が、遺言に依って少量であるがまかれています。

誠に勝手なお願いかも知れませんが、時にお気づきになったらお参りになって下さいますれば、横田先生大変お喜びになると思います。

終わりに臨み、横田ご夫妻のご冥福を心からお祈りします。